

02 歴史展示の具体的内容

歴史ストーリー

テーマストーリー ＜東アジアとの国際交流＞

語り部 吉備真備

＜東アジアとの国際交流＞ 概要

奈良時代には、東アジア世界の中での日本の地位を確実なものにするため遣唐使を頻繁に派遣し、中国の制度や技術、文化等を積極的に取り入れようとしていました。唐との交流を通して、中国だけでなくインドや西アジア、東南アジアなどの文物も日本に伝えられ、奈良時代の文化は国際色豊かな「天平文化」として花開きました。そうした東アジアとの国際交流の展開を紹介します。

【1】文化の直接輸入

遣唐使は、奈良時代の70余年間に6回派遣されました。吉備真備や阿倍仲麻呂、僧玄昉、普照らが国際交流に貢献し、国際色豊かな文物や唐の諸制度の直接輸入、高僧・鑑真の来日による仏教の発展などの成果をあげました。特に唐朝に仕えた阿倍仲麻呂は日中交流の架け橋としての役割を果たし、直接的で正確な情報が伝えられたことによって、日本の文化や政治制度は急速に発展していきました。



【2】記紀・万葉集の編纂

中国や朝鮮半島諸国では早くから文字が使用され、それぞれの国の正史が編纂されていました。日本もこれに対抗して『古事記』『日本書紀』という国史の編纂事業を推進しました。淡海三船は、歴代天皇の漢風諡号を撰定するとともに、日本人が作った漢詩の秀作を集めた『懷風藻』を編集しました。また大伴家持らによって、万葉仮名を駆使して日本人の心を表現した和歌を集めた『万葉集』も編纂されました。



【3】平城京のくらし

遣唐使や留学生たちが持ち帰った最新情報によって、政治制度や生活習慣などに大陸文化の影響が見られるようになり、平城京に暮らす人々の暮らしぶりは大きく変化していきました。貨幣経済が広がり、都の東西の市では全国から集められた品々が取り引きされて賑わいました。一方で、山上憶良の「貧窮問答歌」に表現された地方の農民たちの暮らしには悲惨なものがありました。



【4】大仏開眼供養会

大仏造立のための技術者として渡来系氏族の国中公麻呂が登用され、752年に大仏が完成、開眼供養会が盛大に開催されました。この開眼会には1万人以上が参列し、インド僧の菩提僊那が導師を務めた法要のあと、中国、朝鮮、ベトナム、ペルシアなどの楽曲や舞踊が披露されました。このイベントは、大仏に国家の安泰を祈るとともに、平城京が長安と肩を並べる国際都市となったことを世に示すものでした。



【5】花開く天平文化

東アジアとの国際交流によって蓄積されたものが、一気に花開いたのが天平文化でした。日本独自の感性に、大陸伝来の技術や文化によって工夫が加えられて、深い精神性を感じさせる仏像や天平文化を彩る工芸品、美術品が数多く作られ、貴族を中心とする国際色豊かな文化が展開しました。国際交流で伝えられた文物は光明皇太后によって東大寺に寄進され、正倉院宝物として後世に受け継がれました。

人物を中心とするエピソードストーリー

奈良時代の国際交流史の展開の中で特徴的に登場する5人の人物にスポットをあてて、その人物に関するエピソードを交えたストーリーという切り口で、語り部の吉備真備が、時代の移り変わりを解説します。

＜阿倍仲麻呂＞ ～朝衡と呼ばれた官人～

717年の遣唐使で入唐した阿倍仲麻呂は、科挙に合格して「朝衡」の名で玄宗皇帝に仕えました。同時に入唐した吉備真備と僧玄昉は735年に帰国すると、直接輸入した政治や文化等の知識を生かし、橘諸兄政権で活躍しました。阿倍仲麻呂は、南方に漂流した平群広成らの救済に奔走したり、鑑真の渡航に力添えをしたりと、日中外交の仲介役として活躍しました。しかし仲麻呂自身は帰国することが叶わず、朝衡として生涯を閉じることになったのです。

＜登場人物＞ 阿倍仲麻呂、吉備真備、玄昉、粟田真人、平群広成、藤原清河、鑑真、普照

＜淡海三船＞ ～「天武」を創った文人～

淡海三船は多くの書物を読破した文人で、漢詩の秀作を集めて『懷風藻』を編纂しました。一方で、大伴家持らによって、日本語に漢字の音を当てはめて表記する万葉仮名を使った『万葉集』も編纂されました。奈良時代に編纂された『古事記』『日本書紀』は、漢文と万葉仮名を駆使して書かれていましたが、歴代天皇の名前は万葉仮名を用いた長くて読みづらいものでした。そこで、漢文に精通する淡海三船は、各天皇の事蹟に依拠して、「天武」や「持統」といった漢字2文字を基本とする漢風諡号を創作したのです。

＜登場人物＞ 淡海三船、太安万侶、舎人親王、藤原仲麻呂、大伴家持、石上宅嗣

＜山上憶良＞ ～貧窮問答歌を詠む～

貨幣経済の広がりや東西の市への物資の集積等により、豊かな生活ができるようになったのは、ごく一部の貴族だけで、都の人口の大半を占める下級官人や庶民の暮らしは最低限度のもので、地方の農民たちの暮らしはさらに苦しいものでした。702年に遣唐使とともに唐に渡り、帰国後に伯耆国司を経て、東宮侍講に就任した山上憶良は、首皇子(のちの聖武天皇)に諸学問を講義するとともに、都の繁栄の陰で生活に苦しむ人々の救済策の必要性も説いたことでしょう。晩年に筑前国司として過ごした憶良は、都と大きな格差のある地方農民の生活実態を「貧窮問答歌」という歌に詠んだのです。

＜登場人物＞ 山上憶良、長屋王、山部針間麻呂

＜藤原仲麻呂＞ ～仏教伝来200年祭～

仏教伝来200年にあたる752年、大仏開眼供養会が盛大に開催されました。国中公麻呂を造仏長官に登用したり、菩提僊那に導師を依頼したり、またベトナム出身の仏哲らに舞踊を披露してもらったりと、この一大イベントを実質的に取り仕切ったのは、大納言・紫微中台長官の地位にあった藤原仲麻呂でした。そしてこの開眼供養会の成功には、日本に仏教を始めとする諸文化が十分に浸透し、自国の文化として受容されたことを示すとともに、日本の国力と技術力が充実していることを国内外に知らしめる象徴的な出来事であったという大きな意義がありました。

＜登場人物＞ 藤原仲麻呂、国中公麻呂、菩提僊那、仏哲、聖武上皇

＜光明皇太后＞ ～国際的文化の輝き～

聖武上皇が亡くなると光明皇太后は、上皇遺愛の品や薬類を東大寺に寄贈しました。皇太后は、鎮護国家の実現を目指した聖武上皇の思いやりが無数の人々に恵みを与え、その徳が大仏の威光によって全世界に及ぶようにと願ったのです。それらの品々は正倉院に保管され、後世にまで大切に伝えられました。また、国中公麻呂や将軍万福らの仏師がその力を発揮する場を与えられて、数多くの優れた仏像を製作するなど、天平文化として花開きました。正倉院宝物や仏像の製作技術等には、国際色豊かな文化の特徴が見られ、1250年の時を超えてもなお、その輝きを失っていないのです。

＜登場人物＞ 光明皇太后、恵美押勝(藤原仲麻呂)、国中公麻呂、将軍万福、吉備真備

＜東アジアとの国際交流＞ ストーリー詳細

吉備真備の語りによる「テーマ：東アジアとの国際交流」についての解説

[吉備真備]

私は吉備真備。奈良時代の学者で、晩年は右大臣として政治を担った者です。

若い頃、遣唐使に随って唐に渡り、留学生として18年間を過ごしました。日本は、当時の世界有数の文明国である唐と積極的に交流し、様々なことを貪欲に吸収しようとしていました。その努力の上に天平文化が花開いたのです。

奈良時代に東アジアとの交流がどのように行われ、日本の文化にどのような影響を与えたのかをお話することにいたしましょう。

第1章 文化の直接輸入

＜阿倍仲麻呂＞ ～朝衡と呼ばれた官人～

粟田真人によって中国との正式国交が回復し、政治制度や文化などが直接輸入されるようになりました。養老元年(717)、平城京遷都後最初の遣唐使が派遣され、私・吉備真備や阿倍仲麻呂、僧玄昉らが留学生として入唐しました。中でも阿倍仲麻呂は科挙に合格し、「朝衡」の名で唐朝に仕えて官途を追求するとともに、日中外交において重要な役割を果たしたのです。

奈良時代の積極外交

奈良時代以前から、日本は大陸との交流によって先進文化を取り入れてきました。飛鳥時代までは、身近な朝鮮半島との交流が主でしたが、702年の遣唐使を皮切りに、わが国は中国との直接交流を図るようになりました。「大唐帝国」として世界で最も進んだ文明を誇っていた中国から、様々な文物や知識を直接輸入しようとしたのです。

717年の第9回遣唐使で入唐した阿倍仲麻呂は大変な秀才で、当時の中国人でもなかなか合格できない「科挙」という官人登用試験に合格し、「朝衡」という中国名で玄宗皇帝に仕えることになりました。そして彼はその後の日中外交において重要な役割を果たすことになるのです。

[阿倍仲麻呂]

平城京遷都から7年、日本をもっと素晴らしい国にするためには、律令制度や生活規範に関する最新知識を、唐から直接学ぶのが最良の方法です。遣唐使は、航海途上で暴風雨に見舞われて命を落とすかもしれない危険を伴いますが、唐に渡れば、政治、文化、学問など今の時代で最高水準のものを学べるのですから、命がけで挑戦する価値は十分にありました。

科挙という登用試験も、どういうものかを知るために受験しました。幸い合格できたので、今後は本場の官僚政治というものを学び、将来日本に持ち帰りたいと思います。

真備と玄昉

私・吉備真備と僧玄昉は、18年間を唐で過ごしたのち、第10回遣唐使の復路に同行し帰国することになりました。阿倍仲麻呂は「さらに官途を追求する」との意欲を示し、唐に留まって私たちを見送ってくれました。帰国の途に就いた4隻の船は途中で嵐に遭遇し、3隻が難破、私たちの船は辛うじて種子島に漂着しました。

私は、唐で手に入れた法律や天文、暦、音楽、儀礼、兵法等に関する書物や日時計、楽器、弓矢などの品物を持ち帰って朝廷に献上しました。私が唐で身につけた膨大な知識を、日本の多くの若者たちに分け与え、わが国を支える人材を育てたいと願っていました。そしてその願いは聞き入れられ、「大学助」に任じられて大学寮で400人以上の貴族の子弟に学問を教えることになりました。また、のちには皇太子である阿倍内親王の教育係も務めることになったのです。

登場人物紹介 / 用語解説

語り部：吉備真備

【きびのまきび】(695～775)

奈良時代の学者、政治家。備中国下道郡(現岡山県倉敷市吉備町)出身。

23歳の時に遣唐留学生として阿倍仲麻呂、玄昉らとともに入唐。41歳で帰国し、唐で身につけた知識により聖武天皇や光明皇后の寵愛を受け、従五位に昇進する。

44歳の時、橘諸兄により玄昉とともに登用され、皇太子の学士等を務める。しかし藤原仲麻呂が実権を握ると、56歳で九州に左遷され、さらに遣唐使として唐に追いやられる。

60歳の時に帰国、鑑真を日本に招き入れる功績があったが、大宰府勤務を命ぜられる。

70歳で造東大寺長官に任じられ帰京。藤原仲麻呂の乱鎮圧にも功を挙げる。

72歳で右大臣に昇進。76歳の時に称徳天皇が崩御、光仁天皇の擁立に関わる。

77歳で政界を引退。その後の生活については不詳。81歳で死去した。

粟田真人

【あわたのまひと】(生年不詳～719)

- 653年、僧道観の名で唐に留学。天武朝以降、官人として朝廷に仕える。
- 701年、遣唐執節使として入唐し、「文明国・日本」を印象づけて、唐との正式国交回復に成功した。

阿倍仲麻呂

【あべのなかまろ】(698～770)

- 717年 遣唐留学生として入唐。
- 753年に帰途に就くが安南(ベトナム)に漂着。翌年長安にもどる。
- 755年に安史の乱が起こり、帰国の許可を得られないまま、770年に唐で客死。

玄昉

【げんぼう】(生年不詳～746)

- 717年、学問僧として入唐し、玄宗皇帝に才能を認められ、紫の袈裟の下賜を受けた。
- 735年、遣唐使船で帰国。多くの経典を持ち帰り、737年、僧正に任じられる。
- 聖武天皇の生母・藤原宮子の病を平癒し、天皇の信頼を得る。

【科学】

〈かきよ〉

優秀な人材を集めるために隋の文帝によって始められた官僚登用試験。合格率は非常に低く、唐の中期では1～2%、合格者は年に30名程度であった。学問に専念できる環境と高名な学者への入門や高価な書物の購入が必要で、及第者の大半は、科挙合格者の子息か富裕階級のいわゆる「貴族」階級というのが実態であった。

玄宗皇帝

【げんそうこうてい】(685～762)

- 唐の第6代皇帝。前半は、「開元の治」を呼ばれる善政により、唐は絶頂期を迎えた。
- 後半(740年以降)は、楊貴妃を寵愛したことで安史の乱の原因を作った。

阿倍内親王

【あべのないしんのう】(718～770)

- のちの孝謙天皇。父は聖武天皇、母は光明皇后。
- 一旦淳仁天皇に譲位したのち、重祚して称徳天皇となった。

一方玄昉は、玄宗皇帝から才能を認められて紫の袈裟を下賜され、5000巻の一切経を持ち帰りました。彼は新しい仏教の教えを日本にもたらすとともに、自分が見た盧舎那仏のことを聖武天皇に伝え、それはのちの大仏造立へとつながったのです。

〔玄昉〕

中国の仏教は日本に比べて大変進んでいた。玄奘三蔵がインドから持ち帰った新訳經典が揃い、新しい教義も次々に生まれている。私が中国にある仏典の大半を持ち帰ったのは、日本にも最新の仏法を急いで取り込み、平和な国づくりに役立てるためだ。

また、中国には素晴らしい仏像もたくさんあった。中でも竜門というところで目にした巨大な盧舎那仏は、国が仏の力で護られている象徴のように感じられ、とても印象的だった…。

なお、難破した他の3隻のうち副使・中臣名代の第2船は、福建方面に漂着し、唐朝の援助によって船を修理して私たちより半年遅れで帰国しました。また判官・平群広成の乗った第3船は、崑崙(こんろん)国(ベトナム方面)に漂着し、苦労を重ねて長安に戻り、朝衡(阿倍仲麻呂)の尽力によって4年後の739年、当時、日本と通交のあった渤海経由でようやく帰国できました。しかし第4船は完全に行方不明でした。このように、当時の国際交流は、命がけの大事業だったのです。

〔平群広成〕

崑崙国に漂着した我々は、現地の兵士に捕らえられ、多くの者がマラリアにかかって亡くなりました。115人いた一行のうち、生き残ったのは私と水夫たちの4人だけでした。崑崙の都で拘留されていた私たちは、唐の欽州在住の商人に助けられ、そこの官吏の援助によって長安に戻ることができました。

長安では、朝衡殿が帰国の方策を探って奔走し、渤海経由で帰国できるよう玄宗皇帝に上奏してくださったのです。こうして渤海入りした私たちは、遣日使節の船に乗せてもらうことになりました。

しかし、途中でまた嵐にあって大使の乗った船が転覆、私は副使の船に乗っていて助かったのです。

阿倍仲麻呂との再会

751年、私・吉備真備は遣唐副使に任じられて再び中国に行くことになりました。そして翌年入唐した私は、長安で阿倍仲麻呂と再会することができました。阿倍仲麻呂は在唐35年を経過し、年齢も55歳になっていました。753年、彼は復路の遣唐使船に乗って帰国することになり、親友の李白、王維らに送別会を開いてもらったのです。

〔阿倍仲麻呂〕

官途を追い求めて35年、いよいよ帰国して、私が身につけた知識を日本の政治や文化に生かす時がきた。唐では玄宗皇帝の側近として華麗な王朝の姿を目の当たりにし、李白や王維といった大詩人とも親しく交わることができた。唐で得た友人たちと別れるのは名残惜しいが、彼らは私の帰国後の活躍を期待して送別の宴を開き漢詩を詠んでくれた。そこには「東方の国々の中では日本を大とする」と書かれており、日本は重んじるべき国であるという認識を中国に与えられたことは、非常に喜ばしいことだと思う。私もお返しに、日本語で和歌を披露したいと思う。

「天の原 ふりさけみれば 春日なる 三笠の山に 出でし月かも」

しかし、阿倍仲麻呂が乗った船は、暴風雨に遭って南方のベトナム方面に流され、755年遣唐大使の藤原清河らとともに長安に戻りました。中国ではこの年に安史の乱が起り、唐朝は行路が危険であることを理由に、仲麻呂、清河らの帰国の許可を出しませんでした。

阿倍仲麻呂は再び唐朝に仕え、ベトナムの総督を務めるなどして、770年に73歳の生涯を閉じました。また藤原清河も帰国の機会を失い、778年に唐で亡くなったそうです。

登場人物紹介 / 用語解説

聖武天皇

【しょうむてんのう】(701～756／在位 724～749)

- 第45代天皇。生母の藤原宮子の病を玄昉が平癒したことで、玄昉を信頼する。
- 天災や疫病、戦乱が続発する社会不安のなか、仏教に帰依し、大仏造立を発願する。
- 752年、東大寺に大仏が完成し、開眼供養会を開催する。

玄奘三蔵

【げんじょうさんぞう】(602～664)

- 中国唐代の僧。インドに旅し、多くの経典を持ち帰る。『西遊記』の三蔵法師のモデルといわれる。
- 経典の中国語翻訳に尽力し、中国仏教の発展に寄与した。

平群広成

【へぐりのひろなり】(生年不詳～753)

- 遣唐使の判官(三等官)として唐に渡る。
- 帰途で難破しベトナム方面に漂着、苦勞して長安に戻り、渤海経由で帰国。
- 古代の日本人の中で、最も広い世界を見てきたとされる人物。

李白

【りはく】(701～762)

- 唐の詩人。中国詩歌史上において、最高の存在とされる。

王維

【おうい】(699～759)

- 唐の高級官僚で、時代を代表する詩人。画家、書家、音楽家としての名も馳せた。

藤原清河

【ふじわらのきよかわ】(生年不詳～778)

- 遣唐大使として752年唐に渡ったが、帰途の船が難破して帰国を果たせず、「河清」と称して唐朝に出仕。
- 清河は唐で客死したが、唐の婦人との間の娘は、778年の遣唐使船に乗り来日している。

8世紀の東アジア交流関係地図



鑑真の来日

遣唐使には物や知識を持ち帰るだけでなく、貴重な人材を日本に招くという役割も果たしました。

735年の私たちの帰国と入れ替わりに普照、栄叡という若い僧侶が伝戒師招請のために入唐しました。そして招請の第一陣として翌年、道璿、菩提僊那、仏哲という僧たちが来日し、官大寺である大安寺の発展に協力しました。

753年、私・吉備真備が遣唐副使として赴いた際、自身は帰国できなかった阿倍仲麻呂の力添えもあり、伝戒師である鑑真を普照とともに連れ帰ることに成功しました。翌年東大寺に着いた鑑真は、戒律制度を整備するとともに、建築、彫刻、医療、薬、香料、茶などの技術や文化も伝えました。彼が伝えた高い技術は、東大寺戒壇院や唐招提寺の建立、仏像の造立などに発揮され、日本の文化発展に大きく貢献しました。

〔普照〕

鑑真和上やお弟子達は、すぐれた仏教者であると同時に技術者でもあり、建築や医術など、様々な分野に精通しておられます。光明皇太后が病に罹られた時も、和上が薬を調合してさし上げ、見事に治されました。和上は正しい仏法だけではなく、最新の技術や文化も日本に伝えられた素晴らしい方です。

このように遣唐使の派遣は、文物のみならず、思想や知識、人材など様々なものをわが国に伝え、日本の国際化に大きな成果をあげました。その才能を日本で発揮することができなかった阿倍仲麻呂も、鑑真和上の招請に協力するなど、唐の高官として日本からの遣唐使たちを有形無形に援助するとともに、その教養や人柄によって唐の人々に対し「アジアの東の端に、唐と同じように優れた文明をもつ君子の国がある」という認識を与えるという、大きな役割を果たしたのです。

登場人物紹介 / 用語解説

普照

【ふしょう】（生没年不詳）

- 興福寺の僧。733年に栄叡とともに伝戒師を招請するために入唐。753年、苦難の末、鑑真来日を成功させた。
- 仏法の伝授に努めたほか、平城京外の路傍に果樹を植えて旅人の便をはかるよう上奏したことが知られる。

栄叡

【ようえい】（生年不詳～749）

- 興福寺の僧。733年に普照とともに入唐。洛陽で道璿に会い、来日を要請。
- 揚州大明寺の鑑真を訪ね、日本への渡航を懇願し、承諾を得た。
- 4度目の渡航に失敗したのち病にかかり、唐で亡くなった。

道璿

【どうせん】（702～760）

- 中国唐代の僧。736年来日し、大安寺に禅院を設置。のち吉野で修禅に精励し、山岳修験者に影響を与える。
- 天台宗にも精通し、最澄は孫弟子にあたる。

鑑真

【がんじん】（688～763）

- 753年、6度目の渡航でようやく日本に到着した。
- 聖武天皇を始めとする400人以上に菩薩戒を授ける。
- 755年、東大寺に戒壇院を開設。759年、唐招提寺を創建。

【コラム】 平城京の人々は、どのように外国の人と会話をしたのか？

奈良時代の平城京には、遣唐使と一緒に唐（中国）、天竺（インド）、林邑（ベトナム）、波斯（はし）・胡国（イラン）、崑崙（インドシナ・インドネシア）といった国々から人々が訪れていた。

外国からきた外交官の場合には、通訳と一緒に来ているので、外交官は彼らを通して交渉を行った。日本側にも同じく通訳がいて、実際に言葉のやり取りをするのは両国の通訳だった。これは現代の外交と同じで、彼らは国の意思が正しく伝わるよう、大変苦心したことだろう。

外交官以外の来日者の多くは、唐に来て住んでいた僧侶たちで、出身地はバラバラであっても、おそらく中国語が堪能だったと思われる。彼らが平城京に初めてやってきたとき、日本にも通訳の多い中国語を共通語として話していたと思われる。また、漢字を使った筆談も行われたと推定される。

また、当時の日本は地方毎の方言が強く、日本人同士であっても会話は容易ではなかったと思われる。

税の運搬や都の警備、土木工事、貴族の屋敷での雑役などに地方出身者が動員され、平城京には全国各地から人々が集まってきていた。東北地方や九州南部に行くときには、訳語（おさ）と呼ばれる通訳を連れて行ったという記録が残っている。したがって平城京内でも、さまざまな方言が話されていたと思われる。このような状況では意思疎通もままならず、工事現場等で適切な指示もできない。また、一緒に働く人々は雑談もできない。こうした中で、共通の言語としての「日本語」の原形が急速に形成されたと推定される。

これは、平城京ができ、全国の人々がなかば強制的とはいえ、都と一緒に住むことになっておこった最大のメリットだと言えるのではないだろうか。

第2章 記紀・万葉集の編纂

＜淡海三船＞ ～「天武」を創った文人～

天平宝字5年(761)に文部少輔に任じられた淡海三船は、神武天皇から元正天皇までの全天皇の漢風諡号(しごう)を撰定する作業を行いました。720年に完成した『日本書紀』を中国の史書と肩を並べる国史とするためには、中国から輸入した知識をもとに、歴代の天皇に漢風の名前をつける作業が必要でした。多くの書物を読破し、漢文に精通していた淡海三船が、その仕事に抜擢されたのです。

日本の物語を綴る ～古事記

歴史書の編纂作業は天武天皇の時代に始まりました。『帝紀』『旧辞』と呼ばれる天皇家の系譜や古い伝承を稗田阿礼が暗誦していましたが、それを太安万侶が文字に書き残し、712年に『古事記』として完成しました。

外国の先進文化を貪欲に吸収しようとしていた奈良時代において、日本古来の伝承をできるだけ原型に近い形で書き残そうとしたのが『古事記』です。

[太安万侶]

文字を持たなかった我々の先祖が、語りという手法によって伝承してきた歴史物語は、わが国固有の貴重な文化です。私は漢文を得意としていますが、漢文では日本語の言い回しや心情はうまく伝えられないと感じました。そこで日本語で文章を綴るために、日本語の発音に似た音や訓をもつ漢字を探して当てはめることにしました。そうすることによって、遠い昔から伝えられている日本語の美しさを残すことができ、大変満足しています。

安万侶は、漢字を日本語の当て字として使うこの方法以外に、純粋な漢文を下敷きにして、それを日本語として読み下す方法も取り入れました。外国の文字である漢字を使って、自国の言葉を書き表すという難しい作業でしたが、安万侶は見事に『古事記』を完成させ、我々日本人は、文字によって自分たちの物語を表現することができるようになったのです。

国史を編纂する ～日本書紀

東アジア諸国では、日本よりもずっと早くから文字が使用され、それぞれの国の正史としての歴史書が編纂されていました。712年に完成した『古事記』は、皇室の系譜と伝承をまとめたもので、「日本」の歴史書と呼べるものではありませんでした。そこで、中国の『漢書』『後漢書』などと並ぶ『日本書』の編纂が舍人親王らによって進められ、その中の天皇の事跡にあたる「紀」が、720年に『日本書紀』として完成しました。

『日本書紀』は中国の歴史書と同じように、漢文を用い編年体で書かれており、国家の正史として周辺諸国と肩を並べることのできる立派なものでした。

[舍人親王]

中国や朝鮮半島諸国と同様に、わが国も古い歴史をもつ由緒ある国家だということを証明するため、天武朝からの悲願であった歴史書がついに完成した。『日本書紀』と名付けたこの史書は、中国の編纂法に従い、中国の書籍からの引用も含め、国内外の多くの資料を参考にして作り上げたもので、どこに出しても恥ずかしくない出来映えだと自負している。これでわが国も、自立した文明国として、世界に堂々と胸を張れるというものだ。

国史の編纂は、「紀」に続く「志」(全国の地誌)や「伝」(諸国の伝承)の作成も進められていました。そのため713年、諸国に対し『風土記』の撰上が命じられたのです。

登場人物紹介 / 用語解説

淡海三船

【おうみのみふね】(722～785)

- 大友皇子の曾孫 文章博士・大学頭を歴任
- 『懷風藻』の撰者と言われている
- 歴代天皇の漢風諡号(しごう)を撰し、鑑真の伝記・唐大和上東征伝を著した
- 『経国集』に漢詩をおさめている

天武天皇

【てんむてんのう】(631?～686/在位 673～686)

- 第40代天皇。飛鳥時代の天皇。壬申の乱を経て、政治体制の大改革を断行した。
- 『古事記』『日本書紀』につながる国史編纂の事業が、天武天皇の命により開始された。

【帝紀・旧辞】

〈ていき・きゅうじ〉

『帝紀』は、天武天皇の命により、川島皇子、忍壁皇子らが編纂したと伝えられる、歴代の天皇および皇室の系譜類をまとめた書物。『旧辞』は、説話や伝承をまとめたものとし、『帝紀』と『旧辞』は別々の書物だと考えるのが通説。しかし、『帝紀・旧辞』を一体のものとする説もある。『帝紀』『旧辞』は散逸して現存せず、詳細は不明。

【古事記】

〈こじき〉

上中下の3巻から成り、上巻は「神話」、中巻は「神武天皇～応神天皇」の15人、下巻は「仁徳天皇～推古天皇」の18人の各天皇の事蹟を記述している。原本は現存せず、後世(室町期が最古)の写本のみ残る。

稗田阿礼

【ひえだのあれ】(生没年不詳)

- 古事記編纂に関わったこと以外、詳細は不明。性別も不詳だが、巫女的な女性ではないかとの説がある。
- 記憶力に優れ、天武天皇の詔により、『帝紀』『旧辞』を誦習したという。
- 藤原不比等の別名ではないかとの説もある。

太安万侶

【おおのやすまろ】(生年不詳～723)

- 711年、元明天皇の命で『古事記』の編纂に着手し、712年に書物として完成。
- 漢字の音と訓を混用し、口誦文字の神話を文字に定着させた。
- 子孫の多人長(おおのひとなが)によると、『日本書紀』の編纂にも加わったという。

【日本書紀】

〈にほんしょき〉

神代から持統天皇の時代までを扱う。全30巻、系図1巻。奈良時代の写本が最古。ただし系図は現存しない。後続の史書と合わせて「六国史」と総称され、その第一にあたる。

舎人親王

【とねりしんのう】(676～735)

- 天武天皇の子。淳仁天皇の父。
- 藤原不比等の死後、知太政官事となり、長屋王とともに皇親政治を支える。
- 淳仁天皇の父として、崇道尽敬皇帝(すどうじんけいこうてい)の名が追号された。

【風土記】

〈ふどき〉

各国別にまとめられた古代の地誌。各国の地名の由来・産物・伝承などを記載。713年、元明天皇が諸国に撰上を命じ、常陸・出雲・播磨・豊後・肥前の5つの風土記が現存する。

しかし『日本書紀』に載る歴代天皇の名前は日本風のもので、たとえば天武天皇は「天淳中原瀛真人天皇(あめのぬなかはらおきのまひとのすめらみこと)」というように長くて読みづらいものでした。藤原仲麻呂が政治の主導権を握ると、官職名を唐風に、また自身の名も恵美押勝と改めるなど唐風政策を推進しました。そこで漢文に長けた淡海三船に、歴代天皇に中国風の名前を付けるよう命じたのです。三船は762年から3年をかけて「神武」から「元正」までの歴代天皇の漢風諡号を創りあげました。

漢文の教養を身につける ～懐風藻

中国にならって律令法を取り入れ、大宝律令によって官僚制度が完成されると、中国の文化に通じ、漢文を自在に操ることは、奈良時代の官人にとって必須の教養となりました。古くは大友皇子や大津皇子らが優れた漢詩を詠み、奈良時代には宴席の余興として漢詩を詠むことが流行して長屋王や藤原四兄弟らが秀作を残しています。

751年に淡海三船がそれらの漢詩を集めて『懐風藻』を編纂しました。そこには大友皇子の作品をはじめ、藤原不比等、藤原宇合、長屋王、大伴旅人らの作品が収められており、律令国家づくりの立役者として活躍した政治家たちが、漢文の名手であったことがよくわかります。

また、淡海三船と並んで「文人の首」と称された石上宅嗣は、自宅の一角に芸亭(うんてい)と名付けた図書館を設けて、学問を志す人たちに公開し、私・真備も二教院という私立学校を作って、貴族の子弟たちの教養向上に努めました。

〔淡海三船〕

私の曾祖父・大友皇子は、当時としては稀にみる漢文の使い手で、優れた漢詩を残しました。その後中国との交流がさかんとなり、今や漢文の教養は官人にとって常識です。多くの書物を読破した私は、近江朝から平城京の今に至るまでの律令国家への歩みの中で、皇族や官人たちによって詠まれた漢詩の中から優秀な作品120編を選び、『懐風藻』として編纂したのです。

日本人の心を書き残す ～万葉集

漢文が官人の教養として重視される一方で、万葉仮名を使って日本人の心を表現するという文化活動もさかんに行われました。5世紀頃から人々の間で歌い継がれてきた和歌が、万葉仮名を使って書き留められ、それらを取りまとめる作業が奈良時代を通して進められ、最終的に大伴家持の手によって、20巻、4500首に及ぶ『万葉集』が完成しました。

〔大伴家持〕

我々日本人は大昔から、愛を伝えたり、別れを嘆いたりする時に歌を用いてきました。歌は私たちの心そのものなのです。人々の間で大切に受け継がれてきた歌を、文字にして残せるようになったことで、何十年、何百年先の人にも、その心を伝えることができます。選者の一人として『万葉集』が完成できたことを、とても嬉しく思っています。

『万葉集』には、皇族や貴族や額田王、柿本人麻呂、山部赤人らの歌人の作品のほか、東歌や防人の歌のような名もない庶民の歌も収められ、歌数の多さや作者層の幅広さで世界に類を見ない優れた歌集です。その選者である大伴家持は漢文にも精通しており、漢詩をもとにして作られた和歌も数多く詠んでいます。日本人が文字を使いこなせるようになっていく過程で、中国の漢詩や文学作品の影響を受けていたことがわかります。外の世界との交流が、日本固有の文化に刺激を与え、『万葉集』に広がりや深みをもたらしました。

漢詩を純粋に追求した淡海三船や漢詩を日本文化に変化させた大伴家持らの活動は、のちの時代における王朝文学の基盤として受け継がれていくことになるのです。

登場人物紹介 / 用語解説

【懷風藻】

〈かいふうそう〉

日本最古の漢詩集。751年に成立。近江朝から奈良朝までの64人の作者による116首が納められているが、序文には「120編」とあり、現存する写本は原本と異なると想像されている。撰者は淡海三船とする説が有力。

大友皇子

【おおとものおうじ】(648～672)

- 天智天皇の皇子。壬申の乱で敗れ自害。明治時代に「弘文天皇」が追号され、歴代天皇に追加された。
- 淡海三船の曾祖父にあたる。

大津皇子

【おおつのおうじ】(663～686)

- 天武天皇の皇子。母は大田皇女(天智天皇の娘)。
- 文武に秀でた人物であったが、謀反の疑いをかけられ自害。

長屋王

【ながやおう】(684～729)

- 天武天皇の孫。藤原不比等の死後、政界の主導者となる。
- 皇親の代表者として大邸宅に住み、海外からの調度品に囲まれた生活を送ったと考えられる。庭園には鶴が飼われ、曲水の宴などが開かれた。

【藤原四兄弟】

〈ふじわらよんきょうだい〉

藤原四子(ふじわらしし、ふじわらよんし)ともいう。長屋王を死に追いやり政権を握った藤原不比等の4人の息子たちのこと。武智麻呂、房前、宇合、麻呂を指す。

藤原不比等

【ふじわらのふひと】(659～720)

- 藤原鎌足の次男。実質的に藤原氏の家祖。
- 唐の律令制度に明るく、律令制定や歴史書の編纂に活躍した。

大伴旅人

【おおとものたびと】(665～731)

- 大伴家持の父。730年に大納言となる。『万葉集』に78首が載せられている。

石上宅嗣

【いそのかみのやかつぐ】(729～781)

- 左大臣・石上麻呂の孫。780年に大納言となる。
- 最初の公開図書館である「芸亭(うんてい)」を開いたことで知られている。

大伴家持

【おおとものやかもち】(生年不詳～785)

- 大伴旅人の子。越中守をはじめ、中央・地方の諸官を歴任。最終官位は中納言。
- 万葉歌人中最多数の479首の歌を残し、編者の一人に擬せられる。

【万葉集】

〈まんようしゅう〉

成立は759年以後と見られる。785年の大伴家持の死の直後に藤原種継暗殺事件が起こり、家持がこれに関係していたとして家財が没収された。その中に家持の歌集があり、これを契機に歌集が世に出て、のちに『万葉集』と呼ばれるようになった。編纂事業の完成は、恩赦により家持の罪が許された806年頃と考えられる。

額田王

【ぬかたのおおきみ】(生没年不詳)

- 『万葉集』に12首の歌を残す7世紀後半の女流歌人。大海人皇子の寵愛を受けたのち、天智天皇に召される。

柿本人麻呂

【かきのもとのひとまる】(生没年不詳)

- 『万葉集』を代表する歌人。雄大・荘重な長歌は他に比類がなく、力強い歌風の歌人。

山部赤人

【やまべのあかひと】(生年不詳～736年?)

- 宮廷歌人で行幸供奉の作が多く、優美な自然を詠んだ代表的自然詩人。

第3章 平城京の暮らし

〈山上憶良〉 ～貧窮問答歌を詠む～

養老5年(721)、山上憶良は東宮の侍講となり、首皇子(のちの聖武天皇)に仏教や儒教をはじめとする諸学問を講義しました。憶良はこの職に就く前は伯耆国の国司を務めており、都の繁栄の陰で生活に苦しむ農民たちの姿を見て心を痛めておりました。憶良は皇太子に為政者としてそうした貧しい人々を救済することの大切さも講じたことでしょう。

役人の勤めと生活

大陸文化は、奈良時代の人々の暮らしの中にもしっかりと根付いていきました。平城宮で働く役人たちは整然とした体制のもと、律令国家を支えるために仕事に励んでいました。

役人たちは勤務時間が厳しく管理されたので、自分の役所に出勤するためには、夜明け前に家を出て平城宮まで歩き、朱雀門が開くと一斉に朝堂院や曹司に向かい仕事にかかりました。勤務時間は午前6時半頃から正午まででしたが、遅刻すると役所に入れてもらえず、また勤務時間内に仕事が処理できなければ、残業が待っていました。

様々な事務手続きが文書によって行われるため、文字や文章を上手に書けることが出世の条件でもありました。地方から大量に送られてくる戸籍、帳簿、勤務評定などの書類の整理、保管などの作業もあり、文字と時間を上手に使いこなすことが有能な役人の条件でした。

〔山上憶良〕

大宝律令ができたばかりの702年、私は遣唐使に随行して唐に赴きました。唐の律令制は日本よりもはるかに進んでいて、統制がとれていることに驚いたものです。このときに得た情報を受けて官人制度が整えられ、藤原京から平城京に遷都したのは、日に日に体制が充実してきています。平城京は法に則った、規則正しく美しい都として、益々発展していくことでしょう。

貴族の暮らしと文化

中国との直接交流による最先端の文化を、最も享受していたのは都の貴族たちでした。広大な屋敷に庭園を築き、曲水の宴や蹴鞠など大陸伝来の遊びが繰り広げられ、外国の歌舞音曲が日本の楽人たちによって演じられました。屋敷内には絨毯や毛皮、ガラス工芸品、楽器などの舶来品があふれ、華やかな色彩に満ちていました。

中国の制度にならった律令制が確立されたことで、都への交通網が発達し、721年に右大臣となった長屋王の屋敷には上総のアワビや伊豆のカツオなど、地方の特産品も届いていました。国際都市・長安を見るような華やかな暮らしが、平城京で営まれていました。

〔長屋王〕

私の屋敷は中国風にしつらえてある。床に敷いた絨毯も、棚などの調度品も、美しいガラスの壺も、私が着ている衣装もすべてそうだ。

我々は、国の上級貴族として、中国の貴族と同じような暮らしをし、世界一流の文化を身につけている。客人を招いての宴会では、国中から集めた山海の珍味が食卓を賑わせるが、これも中国にならって国の仕組みを整えているおかげじゃ。

登場人物紹介 / 用語解説

首皇子(聖武天皇)

【おびとのおうじ(しょうむてんのう)】(660～733／在位 724～749)

- 文武天皇の長男。母は不比等の娘・宮子。第45代天皇。724年、元正天皇の譲位を受けて即位。
- 疫病、天災、戦乱の続発など社会不安の増大に、為政者として心を痛め、仏教にその活路を見いだして大仏造立を発願した。

山上憶良

【やまのうえのおくら】(660~733)

- 山上氏は栗田氏の支流が通説だが、百済系渡来人との説もある。
- 702年の遣唐使で入唐。
- 帰国後、伯耆(現鳥取県)の国司を経て、東宮侍講となり、のち筑前(現福岡県)の国司となる。
- 『万葉集』に78首が選ばれ、代表作に「貧窮問答歌」「子を思ふ歌」などがある。

[朝堂院]

〈ちょうどういん〉

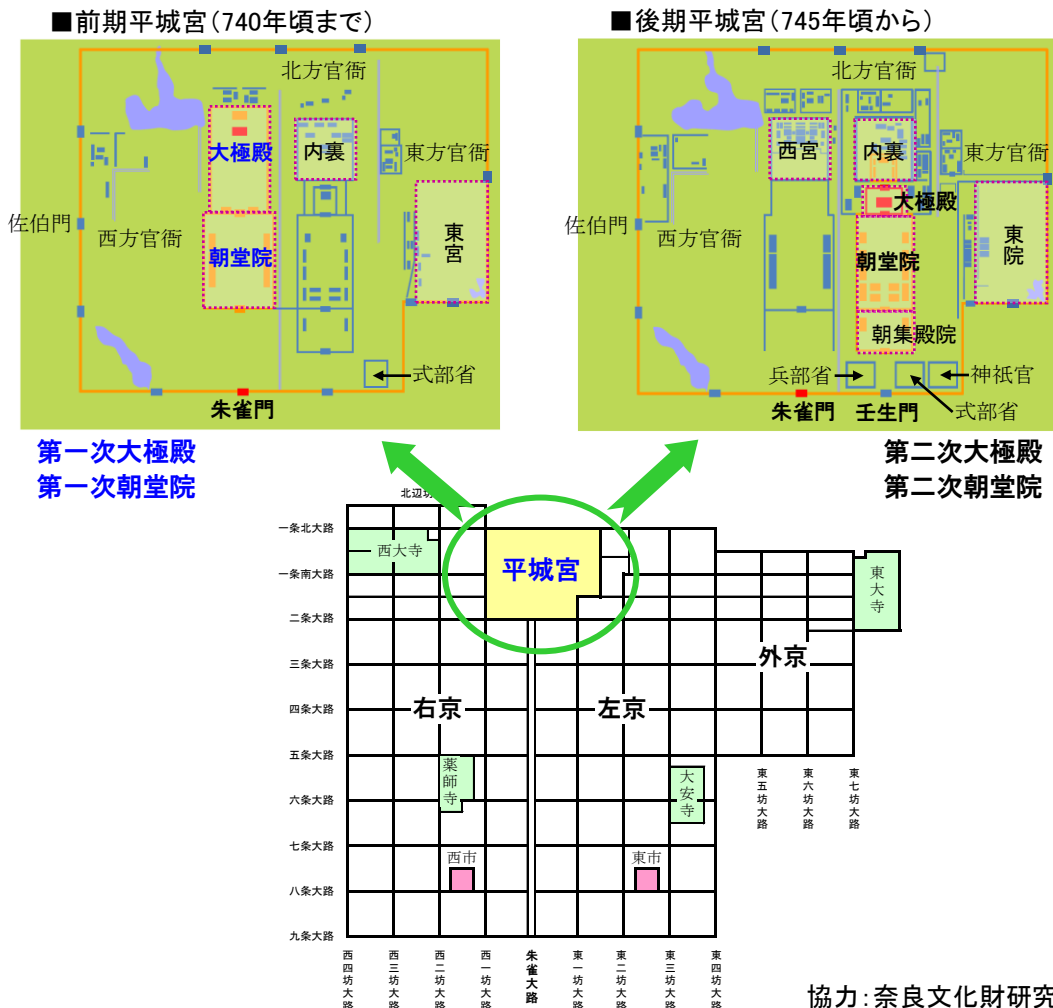
政務・儀式などが行われた宮城内の正庁。「八省院(はっしょういん)」とも呼ばれた。広義では、大極殿・朝堂・朝集殿の総称を指し、狭義では朝堂部分を指す。朝堂院の名は、ここで役人が夜明けから昼ごろまで執務したことによるという。

[曹司]

――
〈ぞうし〉

宮中や宮庁内に設けられた女官・官吏などの部屋。

平城宮内の施設配置図



協力：奈良文化財研究所

下級役人や庶民の暮らし

正六位以下の下級役人は、中国の条坊制にならって、きちんと区画整理された土地を与えられて生活していました。この頃の平城京の人口は約10万人で、役人と僧侶を合わせて4万人ほどが暮らしていました。五位以上のいわゆる貴族は100～200人ほどで、大半は下級役人と庶民たちでした。

私・真備も唐から帰国した頃は従八位下という地位でしたので、130坪ほどの土地に簡素な建物を建て、畑を作って生活していました。地位が上がればもう少し広い屋敷地が与えられましたが、庶民の場合はもっと狭い土地に10人以上の家族とともに暮らしているのが当たり前でした。

そうした暮らしの中にも大陸文化が浸透し、物々交換による生活から、銭を使って買い物をする貨幣経済が広がりつつありました。都の東西に設けられた市では、布や帯などの繊維製品、櫛、針、筆などの日用品、弓などの武器や馬具、食器、農作物や海産物などの食料品、薬、香や牛馬までもが取り扱われていました。大陸から伝わった「すごろく」に興じる人や、西域を発祥とする大道芸なども、市に来れば見ることができました。また沿道には告知札が立てられ、迷子やさがし物などの情報がやりとりされました。庶民の中で文字を読み書きできる者が、読めない者に読んでやり、上手に情報交換していたのです。

〔山部針間麻呂〕

私は少初位下という一番下っ端の役人です。年収は230万円ほど。通勤に1時間かかるのですが、家賃はタダなので文句は言えません。家族が多いので生活が苦しく、先日、土地と家を担保に600文(約18万円)の借金をしました。利息が90文と高いのですが仕方ありません。最近は何物も値上がりが激しく、同僚たちの間でも借金している者が多いです。

ささやかな楽しみは、自宅近くにある東の市を覗くこと。市には各地から運ばれてきた魚や野菜、米などのほか、唐風の揚げ菓子や良い匂いの香、色とりどりの布などが集まっており、見て歩くだけでも楽しいものです。

地方の人々の暮らし

都ではそれなりに国際色豊かな都市生活を送ることができましたが、地方ではまだまだ日本古来の生活を送り、堅穴式住居に住む人々の暮らしは厳しいものでした。晩年を筑前の国司として過ごした山上憶良は、都とは大きく格差のあるその生活の実態を「貧窮問答歌」という歌に詠みました。憶良はその歌を通して、国家の繁栄を目指す律令法を遵守することが、逆に農民たちを苦境に追い詰め国力を衰退させる結果となっている、官人制度の矛盾点を指摘したのでした。

〔山上憶良〕

私が筑前の国司として赴任し、かの地で目にしたのは、都の繁栄とは裏腹な悲惨な実態でした。「潰れたように倒れかかった小屋の中に、地べたに藁を敷いて身を寄せ合うようにしてうずくまっている家族がいる。食べ物がないので、かまどに火の気がなく、食器類にはクモの巣が張っている。精気もない状態の彼らのもとに、短い棒を持った里長が税の取り立てにやってきて、大声でわめき立てているのだ。」こうした疲弊する農民たちを救うことも、私たち役人の務めであるはずですが、税を滞りなく徴収することは役人としての重要な務めなのです。

東アジア文化の恩恵を地方にも浸透させて、人々が文化的な暮らしを営めるようにしていくためには、いったいどうすればよいのでしょうか。

登場人物紹介 / 用語解説

山部針間麻呂

【やまべのはりまろ】（生没年不詳）

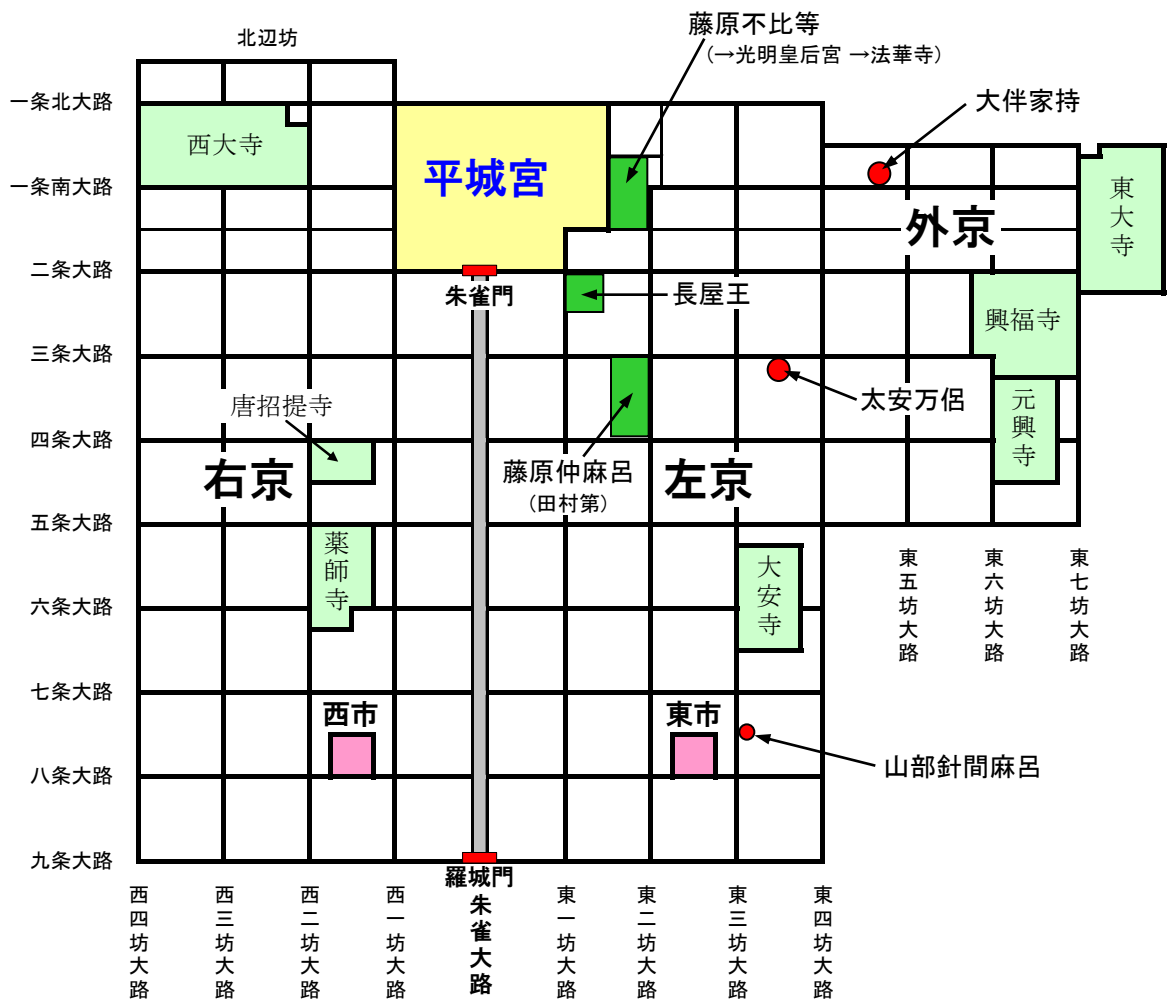
- 正倉院古文書に名前が残し、その記述から、下級役人（庶民）の生活が窺われるとともに、中国伝来の貨幣経済が根付いていることの証にもなっている。
- 針間万呂の居住地とされている左京八条四坊は、東市の推定地の東方に隣接。

〔貧窮問答歌〕

〈ひんきゅうもんどうか〉

山上憶良が731年から733年頃に作った長歌。『万葉集』巻5に収録。
農民の貧しさと里長の過酷な税の取り立ての様子を問答の形で歌っている。

平城京の役人の住居



第4章 大仏開眼供養会

＜藤原仲麻呂＞ ～仏教伝来200年祭～

日本への仏教伝来200年の節目にあたる752年、大仏開眼供養会が盛大に举行されました。大仏に魂を吹き込む導師役としてインド僧の菩提僊那が拔擢され、大仏開眼を祝う祭典では諸外国の音楽や舞踊が披露されるなど、国際色にあふれたイベントが展開されました。

そして平城京が唐の長安と肩を並べる国際都市になったことを世界に示した、この一大イベントを実質的に仕切っていたのは、当時、大納言の地位にあった藤原仲麻呂だったです。

国中公麻呂の登用

奈良時代の日本が成し遂げた、最も大きなプロジェクトが大仏の造立でしょう。

世界では、アフガニスタンのバーミヤンの石仏や、中国の雲崗・竜門の石仏など巨大な仏像が造られていましたが、日本人が造ろうとしていた高さ16mの金銅仏は、鑄造の仏像としては世界最大のものであることは間違いないでしょう。

当時の鑄造大仏としては、飛鳥寺の大仏がありましたが、高さは2.5mでした。今回の大仏はその6倍もある巨大なもので、誰も造ったことがありません。746年に式部卿となって人事権を握った藤原仲麻呂は、百済系渡来人の子孫である仏師・国中公麻呂を造仏長官に登用し、この巨大大仏の造営を指揮させたのです。

〔国中公麻呂〕

技術的なことは祖先から教わっていましたが、これほど巨大な仏像は、どうやって造ればよいのだろうか。かなり悩んだ末に考えついたのが、まず大仏の原型を塑像で造り、それを八段に分けて、下から順に一段ずつ鑄造していくという方法です。一段目の鑄造が終われば土で埋めて、そこを足場に二段目に取りかかります。そして最上段まで行けば、大仏が出来上がるという仕組みです。

理屈ではうまくいくはずなのですが、何しろ尋常な規模ではなく、大きな山を造るようなものなので、何が起るかわかりません。

しかし、私もこの国を代表する技術者。先祖の名にかけても、絶対に成功させてみせます。

鑄造が始まったのは747年の秋。大勢の人が一斉にタタラを踏み轟かせると、炉は紅蓮の炎を巻き上げ、ドロドロに溶けた銅が地響きを立てて湯口に滑り落ちました。気の遠くなるような作業が続けられ、2年後の749年秋、銅製の仏像が小山の中から姿を現したのです。

この年の4月、陸奥国から鍍金用の黄金が献上されました。これまで日本では採れないと言われていた砂金が、百済系の渡来人によって発見されたのです。7月、大仏造立を発願された聖武天皇が娘の孝謙天皇に譲位すると、藤原仲麻呂は大納言に就任し、光明皇太后や孝謙天皇の信任を得て、事実上の実権を握ったのです。

そして、完成が近づいた大仏の開眼供養会を、欽明天皇13年(552)の仏教伝来から200年目の節目にあたる752年の仏誕の日(4月8日)に開催することを決めました。

インド僧・菩提僊那

孝謙天皇に譲位したあとの聖武上皇は、沙弥勝満と号してひたすら仏教に帰依し、大仏開眼供養会では導師を務める予定でした。ところが、もともと病弱な上皇の体調が思わしくなく、導師の役はインド出身のパラモン僧で大安寺に滞在していた菩提僊那に依頼することになりました。

また肝心の仏像も752年3月によく鍍金作業が開始され、大仏殿も骨組みができていただけでした。何としても開眼会を成功させたい藤原仲麻呂は、仕上げ作業を急ぐように命じ、なんとか大仏の鍍金を済ませました。大仏のまわりには美しい刺繍を施した五色の幡や色とりどりの花を飾って、華やかさを演出したのです。

あいにく4月8日は天候が悪く、翌日に延期された開眼会には、国内および海外から1万人を超える僧侶が集い、菩提僊那を導師として読経の声が響きわたりました。

登場人物紹介 / 用語解説

藤原仲麻呂

【ふじわらのなかまろ】(706～764)

- 藤原武智麻呂の次男。のちに唐風化政策を主導し、「恵美押勝」と改名。
- 橘諸兄との勢力争いも絡んで、聖武天皇の大仏造立事業を支持し、積極的にこれに関わる。
- 大仏開眼供養会後も、大仏造立および東大寺の伽藍整備を継続させる。

国中公麻呂

【くになかのきみまろ】(生年不詳～774)

- 天智朝(663年)に帰化した百済の技術者、国骨富(くにのこつふ)の子孫。
- 東大寺法華堂の諸像を造る。
- 東大寺大仏の鑄造を鑄師・高市大国とともに成功させる。

孝謙天皇

【こうけんてんのう】(718～770／在位 749～758)

- 第46代天皇。聖武天皇と光明皇后の娘。
- 藤原仲麻呂を信頼し、即位後も仲麻呂に実権を委ねる。

【コラム】「大仏造立プロジェクト」に、国民の約半数が参加

聖武天皇は、「大仏造立の詔」の中で、民間の仏教信者である「知識」たちに参加を呼びかけた。これにいち早く応えたのが行基とその弟子たちであった。

平城京で大仏造立が始まった天平17年(745)には、国中公麻呂が造仏長官に任命される。公麻呂が大仏造立事業の技術的な指揮をとり、大鑄師・高市大国(たけちのおおくに)、高市真麻呂(たけちのさねまろ)、柿本小玉(かきのもとのおだま)などが大仏の鑄造を監督した。そして、大仏殿の造営を含む工事にかかわった人々は、材木知識51,590人、大仏殿の建立に従事した役夫1,665,071人、金知識372,075人、鍍金にあたった役夫514,902人にのぼり、合計延べ2,603,638人と記録されている。奈良時代の総人口は560万人と推計されており、当時の国民の約2人に1人が、このプロジェクトに参加した勘定になる。

完成した大仏殿は、東西約88m、南北約52m、高さ約47mであり、現在の大仏殿の約1.5倍の大きさであった。

【コラム】「大仏開眼会」の導師に、インド僧を起用

天平勝宝4年(752)4月9日、大仏開眼の法会が行われた。病弱な聖武太上天皇に代わり開眼の導師を務め、全長約200mに及ぶ長い「開眼縷(る)」の先に結ばれた筆を取ったのは、インドからの渡来僧・菩提僊那である。聖武上皇の体調不良等の理由により急遽交代したのか、もともと菩提僊那に依頼していたのかは意見の分かれるところだが、いずれにしても彼が導師を務めたのは事実である。

唐にいた菩提僊那が遣唐使船で来日したのは天平8年(736)。聖武天皇が菩提僊那から、パーミヤンや敦煌の大仏(石仏)の話聞き、「日本にも大仏造立を」と願った可能性は十分にある。菩提僊那にしてみれば、本国インドには無く、周辺諸国にしかない大仏が日本にもあれば、インド仏教の隆盛を証明することにつながる。また、日本としてもインド僧と直接関係があることをアピールすれば、仏教において日本と唐が同列の位置にあることを証明できる。

大仏造立は、日本とインドの利害と威信が絡み合った出来事でもあったのだ。

〔菩提僊那〕

来日して16年、日本の仏教興隆に努めてきましたが、今日このような大役を果たせたことを、心から嬉しく思っています。故国のインドでも、これほど巨大な金銅仏を見たことがありません。インドで生まれ、東へと伝わってきた仏教は、ここ平城京で大輪の花を咲かせました。仏教で世界が結ばれていることを、今日ほど実感したことはありません。故郷を遙か離れた日本への途を示していただいた御仏の導きに心から感謝したいと思います。

華を添える楽団・舞踊団

開眼の儀式のあと、大仏殿の前庭では様々な国の舞や楽曲が演じられました。伎楽をはじめ、日本の五節舞や久米舞、中国の散楽や朝鮮半島の高麗楽(こまがく)、タイの度羅楽(とらがく)、さらにはベトナムやカンボジア地方の林邑楽(りんゆうがく)など、異国情緒漂う演目が次々に繰り広げられました。

〔仏哲〕

私は故国の林邑国(ベトナム)からインドに渡り、師となった菩提僊那とともに中国を経て来日しました。大安寺で楽人たちに林邑楽を教えてきましたが、特異な装束と仮面をつけたこの舞楽は、いかにも異国風で、国際的なイベントにふさわしいものだと思います。故国の舞を、このような晴れやかな場で披露することができて、感無量です。

大仏開眼供養会の意義

大仏造立を発願した聖武上皇は、きらびやかな開眼供養会の様子を満足そうに見守っていました。詔から10年、持てる技術のすべてを注ぎ込んだ大事業は見事に成功し、世界最大の金銅仏は燦然とした輝きを放っていました。

盛大な大仏開眼供養会によって、日本は諸外国に負けない立派な文化をもつ先進国家であることを印象づけました。国際都市・平城京が世界に発信されたのです。

〔聖武上皇〕

仏教発祥の地であるインド、そして中国や朝鮮半島にも勝るとも劣らない仏を、ここ平城京に造ることができた。これからは諸外国において、アジアの東の端に盧舎那仏に護られた素晴らしい国があると、語り伝えられることであろう。

大陸文化を吸収することで、自国の文化を発展させてきた我々だが、今後は我々自身が手本とされ、憧れをもって見られるような国になってほしい。そのためには、なお一層努力しなくてはならぬ。

この一大イベントを成し遂げて、藤原仲麻呂も満足気でした。しかし、未完成の大仏の仕上げ作業と東大寺の伽藍整備という仕事が残されていました。大仏の台座と講堂が756年、金堂にあたる大仏殿が758年、南大門と東西2つの七重塔が764年頃に完成し、さらに大仏の光背の完成は771年で、大仏開眼後も20年に渡って造立事業は進められていくのです。

藤原仲麻呂は、政治の主導者としてこの事業に巨額の国費を投じて大仏と東大寺を完成させました。しかし、そのために農民たちの税負担が重くなって平城京内に浮浪者や餓死者が増え、地方では崩壊寸前の村も見られました。「大仏の慈悲によって国を護り、民を護る」という聖武天皇の思いとは裏腹の状況があったことも事実です。

それでも大仏開眼供養会には、当時の日本に、この大事業を完遂するだけの国力と技術力の充実があり、日本が文化国家になったことを国内外に知らしめる象徴的な出来事であったという大きな意義がありました。

登場人物紹介 / 用語解説

菩提僊那

【ぼだいせんな】(704～760)

- 736年来日したインドの婆羅門僧。唐僧・道璿(どうせん)、林邑僧・仏哲らとともに来日。
- 聖武上皇が病弱であったことから、大仏開眼供養会で上皇にかわり導師を務めた。
- 聖武天皇、行基、良弁とともに「東大寺の四聖(ししょう)」と呼ばれた。

〔五節舞〕

〈ごせちのまい〉

大嘗祭や新嘗祭に行われる豊明節会で、大歌所の別当の指示のもと、大歌所の人が歌う大歌に合わせて、4～5人の舞姫によって舞われる舞。天武天皇の時代、吉野に天女が現れて舞ったとの伝説に依拠し、5度袖を振って舞う。袖を振るのは呪術的な行為であると考えられている。奈良時代には、演奏の機会は限定されていなかった。

仏哲

【ぶってつ】(生没年不詳)

- 林邑国(ベトナム)出身の渡来僧。インド僧・菩提僊那に従って来日し、大安寺に住む。
- 752年の大仏開眼供養会においても林邑楽を演じた。

〔コラム〕「大仏開眼供養会」に華を添えた、国際イベントショー

大仏開眼供養の厳かな儀式が終わると、南門から雅楽寮や諸寺の楽人・舞人が列をなして参入し、聖武上皇の合図で大歌が始まった。

大伴氏が琴を弾きながら歌い、佐伯氏が刀を取って舞う「久米舞」、鎧姿で刀と盾を手にして勇壮に舞う「盾伏舞(たてふしまい)」、日本古来の歌舞が終わると、引き続いて外国の楽舞が始まった。「度羅楽(とらがく／済州島またはタイ西部の音楽)」のパレードに続いて、100人を超える少女たちが舞い歌う「女踏歌(おんなとうか)」、次いで「唐古楽(とうこがく／唐代前期以前の音楽)」の舞、さらに笛・拍板(びんざさら)・腰鼓(ようこ)で囃しながら、雑伎や舞踏劇を演ずる「唐散楽(とうさんかく)」などが賑やかに繰り広げられた。

こうした演舞の中心は伎楽(ぎがく)だった。伎楽は、古代の仮面舞踏劇で、能・狂言・歌舞伎などのルーツともいわれる民族舞踊である。なかでも林邑(りんゆう／ベトナム南部)の舞楽はひととき注目を集めた。面に襦襦(りょうとう)装束姿で走り舞いをする様子は異彩を放っていた。

さらに、新羅・百済・高句麗の三韓楽の代表として高麗楽(こまがく)が演奏され、続いて唐中楽が演じられた。あでやかに袖をひるがえして舞う唐女舞のあとに、フィナーレとして再び高麗楽と高麗女楽が演じられ、壮麗・華やかな国際イベントショーは終了した。

※拍板…数枚の硬い木板や竹片の一方に穴を開けて紐で結び、束状にして打ち鳴らす打楽器のこと。

※腰鼓…長い紐で首に掛け、腰のあたりで横につるし、両手で打ち鳴らす鼓のこと。

※襦襦装束…掛け鎧と呼ばれる古代中国の鎧を模した衣装で、刺繍を施した厚地の絹を、膝上までを覆う丈の袖が無く脇のあいた貫頭衣の形に仕立てて、束帯などの服装の上に着用して帯を結んで使用した。

第5章 花開く天平文化

＜光明皇太后＞ ～国際的文化の輝き～

大仏開眼から4年後の天平勝宝8歳(756)5月、聖武上皇が亡くなりました。光明皇太后は上皇遺愛の品や薬類を大仏に奉獻されました。その後も、上皇や皇太后のゆかりの品々を奉獻され、光明皇太后の甥にあたる藤原仲麻呂は、それらの品々を東大寺の正倉に納めるとともに、その目録作成と出納管理を命じました。東大寺は天災や戦火によって何度も大きな被害を受け、特に戦時に持ち出されて失われた武器や武具等もありますが、国際色を示す正倉院宝物の多くは大切に保管され、1250年の時を越えてもなお、当時の輝きは失われていないのです。

天平文化の国際性

奈良時代、中国や朝鮮半島から平城京を訪れた外国人は目を見張りました。そこには唐の都・長安とそっくりな光景が展開していたからです。規模こそ長安城の4分の1程度でしたが、市街は整然と区割りされ、都の北端には長安と同様、壮麗な大極殿が堂々とそびえ立っていました。

ローマ、バグダッドと並ぶ大都市だった長安には、世界中から人や物が集まり、殷賑を極めていました。そんな長安の姿をそのまま写し取ったかのような平城京の姿は、海に隔てられているにもかかわらず、文化の直輸入をめざしたわが国の情熱と努力の賜物でした。

淳仁天皇が即位して右大臣となった藤原仲麻呂は名を恵美押勝と変え、政治制度や官名も中国風に改めて、平城京をさらに長安に近いものとし、まさに咲く花の匂うがごとき国際都市となりました。

〔恵美押勝(藤原仲麻呂)〕

シルクロードの最終地点である長安から、さらに数千キロも離れた日本に、長安さながらの都があることに、外国からの使節はとても驚いている。しかし我々にとって、世界の中心である唐の都は大いなる憧れであり、少しでも追いつきたいという気持ちが、この平城京を造り上げたのだ。太政大臣を「大師」、大納言を「御史大夫」などのように官職名まで中国風に改めたのも、その気持ちの表れだ。世界一の都を手本にして、大陸の東のこの島国にも、世界一の都を築いてみせよう。

正倉院宝物の国際性

756年に聖武上皇が亡くなられたのちに、光明皇太后によって東大寺・盧舎那大仏に奉獻された品々は、正倉院に納められ大切に保管されました。その宝物は国際性豊かで、アフガニスタンの瑠璃(るり／ラピスラズリ)、地中海の瑪瑙(めのう)、東南アジアの夜光貝、中国の琥珀(こはく)など世界各地の材料を用いて作られており、華やかな国際交流を物語っています。

宝物の中には、奈良時代に寺院の法要などで演じられた伎楽の仮面があります。中国の美女である「呉女」、インドシナ・マレー半島あたりの「崑崙(こんろん)」、インド僧の「婆羅門」、ペルシアの「酔胡王」など、伎楽に使用される面は、様々な民族の特徴をよく表しており、奈良時代の文化の国際性が見られます。

〔光明皇太后〕

聖武天皇が日頃使われていた品々は、異国の薫りのする美しいものばかりでした。ラクダに乗ったペルシアの楽師の姿を螺鈿(らでん)細工で表した琵琶や、象牙や黒檀で鳥や花の文様を描いた双六(すごろく)盤など、帝も私もまだ見ぬ外国への憧れをかき立てられたものです。日本を出たことはありませんが、私たちは国際色豊かな品々に囲まれ、異国情緒の漂う中で暮らしていたのです。

しかし帝が亡くなられた今、これらの品々を目にしていると昔のことが思い出されて泣き崩れてしまいます。そこで、亡き帝の思いやりが無数の人々に恵みを与え、その徳が全世界に及ぶようにと願い、東大寺に寄贈するのです。大仏様、どうか人々をお救いくださいますよう、伏してお願いいたします。

登場人物紹介 / 用語解説

光明皇太后

【こうみょうこうたいごう】(701~760)

- 藤原不比等の娘で、聖武天皇の妃となり、皇族以外で初の皇后となった。
- 仏教に深く帰依し、造寺・造仏や貧民救済などの社会福祉活動を積極的に行った。
- 聖武上皇の死後、四十九日に遺品などを東大寺に寄進し、正倉院が創設された。

〔正倉院宝物〕

〈しょうそういんほうもつ〉

光明皇太后が、聖武上皇の死後に上皇遺愛の品を東大寺に献納したことに始まり、大仏開眼供養会関連の品々や薬など約9000点にのぼる宝物の総称。宝物の中には、シルクロードを経てもたらされたものも多く存在する。

〔殷賑を極める〕

〈いんしんをきわめる〉

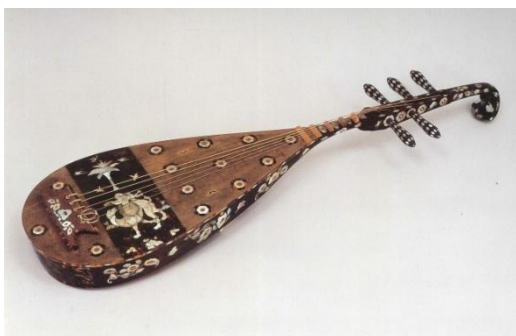
活気があって賑やかなこと。殷は中国の古代王朝で、外の人々が「殷」と呼び、自らは「商」と言っていた。商は高台にある狩猟農工都市で、非常に繁栄しており、外の人々の憧れの的であった。他国の人々は「殷」の「賑わい」を羨ましく思い、「殷賑を極める」と表現した。

淳仁天皇

【じゅんにんてんのう】(733~765/在位 758~764)

- 第47代天皇。舍人親王の七男。孝謙天皇の譲位により即位。
- 藤原仲麻呂と強い関係を持っており、実権は仲麻呂が握っていた。
- のちに孝謙上皇と不和になり、恵美押勝の乱後、皇位を廃され淡路に流罪、「淡路廢帝(あわじはいたい)」と呼ばれる。

正倉院宝物



らでんしたん
螺鈿紫檀五絃琵琶



るり
紺瑠璃杯



たいまいらでん
瑠瑠螺鈿八角箱



しっこへい
漆胡瓶

仏教美術の中の国際性

奈良時代には、国際的に水準の高い仏像も数多く作られました。東大寺の盧舎那大仏は鑄造仏としては世界最大のもので、興福寺の八部衆像や十大弟子像、東大寺法華堂の不空罽索観音像、唐招提寺の盧舎那仏坐像や鑑真和上像などは乾漆造、新薬師寺の十二神将像などは塑造という技術を用いて作られました。

鑄造や乾漆造、塑造などの技術はもともと中国で生まれたものですが、国中公麻呂や将軍万福など渡来系の仏師たちが登用されて、優れた仏像を次々に作り上げていきました。こうした仏師たちは、仏教を厚く信奉した光明皇后によって、その力を発揮する場を与えられ、素晴らしい仏教美術を生み出すことができたとも言えるでしょう。そうしてこれらの作品は、後世には国際的にも高い評価を受けるようになったのです。

[将軍万福]

飛鳥時代に止利仏師が日本で初めての仏像を作って以来、我々仏師は中国やインドの作風を意欲的に学んできました。

飛鳥仏は杏仁形の目を持ち、口元にわずかな微笑みを浮かべているのが特徴で、続く白鳳時代には、顔に丸みを帯びて目は半眼となり、全体に明るく柔らかな表現に変わりました。そして奈良時代になると、より写実的で、しかも深い精神性を感じさせる仏像へと変化していきました。

我々は今、人々の心が求めるものを形にする表現力と、それを実際に作り上げる技術力の、両方を身につけたという手応えを感じています。

東アジアとの文化交流

奈良時代の日本は、中国の文化を意識的かつ積極的に取り入れました。命がけで中国に渡った遣唐使や留学生たち、また中国や朝鮮半島などからの来日した外国人たちの働きによって、日本の文化水準は飛躍的に向上し、文学、工芸、仏教美術などの分野で素晴らしい作品が多数生み出され、天平文化として開花しました。このことは、東アジアの中での日本の立場を確固たるものとするのに、大きな力となりました。

私・真備は2度中国に行き、本物の長安を見てきました。2度目の時は、聖武上皇や光明皇太后のお気に入りとなっていた私を中国へ追い払おうと藤原仲麻呂が画策したようですが、私にとっては旧知の阿倍仲麻呂に再会し、また彼を通じて最新の中国情勢を知ることができたので、非常に有意義なものでした。残念ながら阿倍仲麻呂を連れて帰ることはできませんでしたが、鑑真和上の来日を実現し、仏教興隆の手助けができました。

藤原仲麻呂の乱後、私は右大臣にまで昇進し、この入唐時の知識を生かして、阿倍仲麻呂の分まで政治や文化の面で活躍することができました。そういう意味では、入唐の機会を与えてくれた藤原仲麻呂に感謝しています。

奈良時代に育まれた国際色豊かな文化が、その後熟成し、洗練されて、平安時代半ばに日本独自の国風文化へと姿を変えていくのです。そして、その国風文化を担ったのは、光明皇太后や藤原仲麻呂と同じ藤原の一族でした。

登場人物紹介 / 用語解説

【鑄造】

〈ちゅうぞう〉

溶かした金属を粘土等で作った鑄型に流し込み、冷やして目的の形状にする加工法。銅像は銅を溶かして鑄造した像のこと。金銅像は、銅像の表面に金箔を貼って仕上げた像のこと。

【乾漆造】

〈かんしつぞう〉

粘土や木彫りで作った概形に、麻布を漆で張り重ねたり、漆と木粉を練り合わせたものを盛り上げて像を形作る方法。この技法で作った像を乾漆像と呼ぶ。

【塑造】

〈そぞう〉

芯木に藁縄などを巻き付けて、粒子の粗い荒土から、細かい仕上げ土へと、粘土を順次盛り上げていき、ヘラや指で造形する方法。インドから伝えられ、中国で発達。写実的表現を尊ぶ。この技法で作った像を塑像と呼ぶ。

【八部衆像】

〈はちぶしゅうぞう〉

八部衆とは、仏法を守護する八神のこと。興福寺の八部衆像は、光明皇后が母の橘三千代の追善のために建立した西金堂に安置されていた。像造は將軍万福、彩色は秦牛養(新羅系渡来人)と考えられる。中でも三面六臂の阿修羅像がよく知られている。

將軍万福

【しょうぐんまんぶく】(生没年不詳)

- 百済系渡来人の系統と考えられている。
- 興福寺西金堂の諸像の作者として正倉院文書にその名が見え、阿修羅像をはじめとする八部衆像、十大弟子像は万福の作とされる

止利仏師

【とりぶつし】(生没年不詳)

- 飛鳥時代の仏師。鞍作止利ともいう。渡来系氏族の司馬達等(しばたちと／しめたちと)の孫。
- 飛鳥寺釈迦如来像(飛鳥大仏)、法隆寺の釈迦三尊像の作者。

